仏のこころ

東郷敏

水には魚泳ぎ　田んぼには稲穂みのる。タイの自然、豊穣な国土をうたった詩である。

七月十日。横浜善光寺派遣留学僧三名がタイ国、ワットパクナムで、「雨安居カウ・パンサー」に得度する。私はこの得度式に参列させていただいた。これまで一度も得度式を見たことがなかった。ところが私に親しい在家からひとりの青年が仏弟子となる。それまで出家する、得度したなどよく耳にする。しかし、そのなんたるかはよく知らない。この正月善光寺ではじめて見る得度式。刻々変る出家者の僧衣と表情に大きな感動を覚え、以来宗教観、信仰心というものが、私の中で変化していることを感じている。

お釈迦さまは、人は生まれることも、老いることも、病むことも、死ぬこともすべては苦。またその間に生ずる嘆き、苦しみ、憂い、悲しみ、会うも、別れるもすべては苦。みじかい「いのち」の中にはまことに思いまかせぬことばかり。これこそが生きている現実の相。万人共通の悩みであり、苦だと謂う。その苦から逃れる

ためには、どうするか、そのとらわれた境遇と病んだ心の原因を尋ね、それらを棄捨し放棄し解脱解放する道しるべ、これが出家であり、出家至上主義を解く上座仏教の真髄。一方、大乗仏教は、当然にして、なにびとも、出家せず究極のさとりに達する道があると主張する。いわゆる在家のままで救われる。この違いが、行や戒律、布施活動に、大きな違いを見せる。

上座仏教は『己こそが　おのれのよるべ』と示し、「自分を救済するものは、自分をおいてない」と教える。これを信じるもののみが佛の助けを受ける資格があるという。万物を創造し、人間の運命を支配する神は不在であるとした。これは仏教以外の宗教とは根本的に異なる。どこまでも他にあらず、自ら救うものは自らしかない、そのためにはまず己をととのえることからはじめる。たゆまず自己を錬磨し、戒律を守ることに道があり。

まことの救いがあると教義は実に明快で徹底した論理と思想をもって教える。これこそ仏陀の教えの基本であり、原点といわれている。

「出家」とは俗世間を捨て仏道修行に入ること。剃髪の式をあげ、僧籍に入ること。「得度」とは、仏道の教化を受け、生死の苦海を渡り、涅槃の彼岸に渡ること（『広辞苑』）と示されている。説明は簡単だが実際は、大変なこと。俗世間を捨てる、生死の苦海を求めて渡るなど勇気以前の決心と心構えが必要なことは言うまでもない。

黒田方丈から上座仏教得度式への案内を受けたとき、なぜまたタイにまで行って得度しなければならないのか、夫々立派な大乗の僧籍をもち、或いはすでに住職にありながら、私には理解しにくい。いったい日本の仏教ではダメなのか。この世に日本以上の教えがあるのか、大乗という最高の教義をもちながら、上座仏教（小

乗仏教）に得度し出家する意味なり、価値があるのかわからずにいた。

黒田方丈の原点

ふり返って黒田方丈、雲水としての修行時代に、大本山總持寺や永平寺に籠もりなんどか荒行に挑む。そして出たり入ったり、その間全国一周托鉢行脚する。それでも求めるものに当らない。摑めない。やがて雲水仲間に呼びかけ、仏陀の原点に立つしかないと、その足でインド仏蹟を訪ね歩く。しかしこの原点で仏陀を探すことは安易ではなかった。すでにインドの仏教は過去のものでしかない。いまは信者に会うことさえむづかしい。

そのはず、五％にも満たない仏教信者。やがてインドをあとにする、そして上座仏教のタイに辿り着く。方丈はいう、今日わが身あるは、上座仏教に出家し得度したおかげ、あの難行苦行がなかったら今の黒田武志はないと言いきっている。戒律二二七を授けられ、行に勤しむなかに自己を発見、自らを救うものは、自らでしかないことを悟る。思いもしなかった僧伽での叢林生活、極貧、とまどいの環境の中でクロダ雲水に一大転換をもたらす。なにごとも物事の根本に力を尽くすのでなければとさらに行三昧に没頭する。学んで厭わざる雲水にいつしか「禅の精神こそ人の生きる道、世界中の人々に釈尊の教えを伝え、伝導することが自らの使命であり働き、これこそ人類の、安心、平和、幸福につながる」と小乗の「行」で大乗の極意を得る。行じること一年半、確信をもった雲水、僧伽生活に区切りをつける。さらに遠く海を越え、アメリカ本土に、そして白人の世界に飛びこむ、兄前角博雄師のもと、禅三昧、開教師として過す。僅か三年の間、アジア大陸から、アメリカ大陸へと駆けぬける「あの道のりは偶然ではな

い。お釈迦さまに導かれた」と述懐する。パクナムでの瞑想と教義は大乗仏教の再認識と再発見。そして真の釈尊の教えに近づいたと実感する。自らに授かった天からの徳命、この徳操を信じ、黒田武志は終極の目的に向い一生一業の成就へと歩き続ける。常にグローバリズムの視野に立つ、歩く道はグローバル。こんなところがグローバリスト・黒田武志といわれる所以である。

方丈はかねがね「私が今日、世界に眼を開く仏教徒になれた原点はワットパクナム」だと言うて憚らない。また第二の故里だともいう。このところ、現地での体験談のなかから、拾ってのちいま少しつっ込んでみる。でなければ、なぜ、小乗の「行」なのかがわからない。

方丈は戒律生活を通して、人間自己をしっかりつかみとる機会にめぐまれなければ、自己の完成も、ましてや自らを教育するすべもない。人間自己を見失ったら、主体性もなく、自主性もなくなる、いつだって肝心なのは、自分自身のことだ。これが修行の心得だという。成程聞いていて解る。しかしまたわかりにくくもある。これは「行」したものと、しない者の相違だろう。今日、禅を通して果たす、仏教国際交流の実績と成果を見るとき、たかが一寺一住職のなせる業ではない。ただひたすら、人を育てる、人材を育成するを悲願とする方丈のもと、出家得度者もあとをたたない。信者といい、檀信徒と得度者の数とその足跡をみるとき、なんとも敬服し、承服せざるを得ない。

善光寺は連日大概三、四十名の方々が勤んでいる忙しい寺。さて本題に、私はその方に申し上げた。「そのブレーンを育てたのは誰ですか、そのブレーンを動かしているのは誰ですか」と。そのときその方は、アッと云われただけで、全く反論なさらず仕舞いでした。どうしたのでしょう。人は時として間違っていることを本当と思

い、誤った場合がある。私も四六時中ある。ただこの間違いに、気づかなかった場合、とり返しのつかないことになる。

これには後日談がある。方丈に「こんな空気があります、どうぞ承知しておいて下さい」と当然にして誰がなどとは言っていない。方丈は「その通り、私の力ではありません。みなさんの御力添えあってのこと、私にできることはあまりに小さく、限りがあります。みなさんの御蔭です」と。「トーゴさん言うてくれる人はありがたい、言うてくれる人が周囲にいなくなったら人間はおしまい。ワタクシにも間違いはあります。否いつも間違っているかもわかりません。寺といえど、企業もしかり、衆知あってこそ成り立つもの、上意下達も大事です。しかしそれより大事なことは、下意の上達です。みなさんの意見を吸い上げ、いかに汲みとるか、これは上に立つものの器です」。トーゴさん、「すべては仏さまからのおあずかりもの、常に人は正しい、明日のことは、仏さまにおまかせすればいいのだからネ…」これは私の了見、見識のレベルの問題だと感じた。私があの方に申し上げたことは必らずしも正しくなかった。私の正義感からでたものであり、方丈の心ではなかった、と反省する。やはり方丈とは次元が違うと思った。

私の仏教も、黒田方丈に学び、教えていただく範囲、それでもいまだ在家の得度さえ至っていない。俗界に未練たらたらそれが決意を促さない。従って口先だけの人間、仏教のなにものかも承知せず、受けうりで書いている。ご覧いただく方は、私よりあらゆる面で、また立場上、仏法に関し広く深い知識、又経験をお持ちの方ばかり。解ったつもりで書くは、僭越至極。実際は解らないことだらけ、疑問をブッツケては、方丈にも叱られたり、怒鳴られる。

しかしやっぱり思う。いったい日本の仏教は、そして僧侶は、「人を救える」のかと。仏教の基本は「弱者へのおもいやり」、これを忘れては、仏教は成りたたない。日々刻々大激変、激動する世界、昨今、人々のもてる苦悩に対し、いったい「真の人心救済」ができるのか、そのためには、まず自らを救う必要がある。自らを救う以前に、その知恵を得るためその働きがなければならない。その働きを人々に与えるだけの、力なり、価値をもつ宗教なのか、僧界なのか。それとも、僧侶なのか。仏教は釈迦誕生以来、今日までの苦悩を解消しただけの、単なる宗教にすぎなかったのではないかなどとも、昨今宗教的意義の希薄となった仏教を感知し、単に儀礼的習慣や儀式のみにとらわれ、在家や信者の精神的規範にはなり得ていないのではないかと、そんな気がしてならない。僧侶は、単なる葬儀の経読み屋、寺は寺たらず、僧は僧たりえないのではないか。これでは新しい時代の新しい世代、新しい悩みには対応できず、世代の仏教離れはさらに進むのではないかと危惧する。

大乗とは、積極的に働きかけ、大きく広く働くのが、名称の由来のはず。指導者たちの待ちの姿勢に苛立つ。なぜ眠っておいでなのか不思議でならない。黒田方丈のいのちがけの活動や行をみるとき、いったい大乗集団は、本当に仏道を行じてゆく決意があるのか、心配になってくる。しかし、中には衣の色を気にせず、周囲にとらわれず、すごく立派で敬虔な素晴らしい、指導者の方がおいでのことも承知している。

二五〇〇年前にはなかった苦悩や諸問題が山積みしている現在、この変化に、対応できるのか、できないのかやはり知りたいのです。次元が違うといわれればその通り、このことは、仏教や宗教には関係ないことではあります。しかしなにをするのでも「人がする」人の心、ここ

ろの在り方にすべてに帰すると思うのです。「心の在り方」を教えたのは、釈尊だと私は思っている。

その釈尊の教えを伝え導くのは、いったい誰なのか。信者はいつでも期待し待っているのです。

タイ国の社会

さて私は再び（昨年十一月にワットパクナムとブッダモンを訪問した）タイに行った。しかしいまだこの国の上座仏教を知らないでいる。黒田方丈に一大変革をもたらし、第二の郷里といわしめた上座仏教。物の本によると、タイ国は世界で最も仏教を信奉している国、そしてその伝統を頑に守っている国だと示してある。実に九五％以上の信者をもつ。ということは限りなく一〇〇％に近いということになる。信仰の自由を認めているにかかわらずタイ国では、なぜこれ程までに仏教なのか、歴史や文献をみる限り、或る程度納得はゆく、しかし充分ではない。周囲は、四つの国、四つの国境を持っている。日本には地つづきの国境がない。なくても決して安泰ではない海の底、制空権は犯され続けている。だから自衛のための準備と体制は怠らない。

タイは実に危い。他国にいつなんどき侵略され、攻め入られても不思議はない。そんな状況下、何百年もアジアで唯一侵略されず、侵略しない。そして植民地になった歴史を持たない国。さらに宗教や民族間の争いもない。二十一種族の多民族国家でありながら、建国以来、一宗一派が存続している事実は驚異でしかない。人々が仏教に救われていなければ、変化したはずである。

日本の仏教だって、六世紀に渡来以来、その精神文化の拠り処であり、原点になっている。

聖徳太子により、仏教が日本に受け入れられ普及。日本最古の憲法十七ケ条も、仏教と儒教の教えの中からつくられていることはすでに承知の通り。以後、奈良仏教時代を経て、伝教大師、弘法大師により広く普及、鎌倉時代になり、さらに一般大衆に普及。空海、最澄、日蓮、法然、親鸞、栄栗西、道元など、仏教の指導者たちが、あい教え、あい学び、あい導きあって綱の如く結ばれ、あたかも壮大な曼陀羅絵図を描くように仏の世界を広めて来た。その影響は大きく日本の大乗仏教も否応が上にも、普及発展、揺るぎ無いものとなった現在、数字で見ることはできない。けれども依然として潜在的仏教徒は決して少なくはない。これには異議があるかもしれないが、おそらくタイ国と数値的には、変らないのではないかと思ったりもする。盆、暮、正月の大移動、神社、仏閣参りは、国民的行事、これに並ぶ、宗教、教団は他にない。しかしこの象徴的仏教でありながら、日本の中で、しっかりとした信仰の対象としてもはや存在しない、しないのに大多数がどちらかといえば、仏教とこたえる不思議。

タイ国の社会の仕組みは、パンフレット程度でみるとき、国民は王室を尊重、崇拝し、国は仏教を保護している。この状況、程度がわからないまでも仏教が発展、存続してきた土壌はわかるような気がする。またタイの憲法にも「国王は神聖にして、侵すべからず」「国王は仏教を信奉し、かつ宗教の擁護者である」と規定されていることから、仏教と国王、国民と社会の在り方が伺える。これはタイ国旗にも、それがよく表われている。

国旗はラーマ六世（現九世）約一〇〇年前の制定によるもの、横に中央の青ライン（王制）を白ライン（仏教）が囲む、さらに両サイドに赤ライン（国と仏教を守るために、流す国民の

団結と血を意味したもの）で囲む三色旗。いかにも、タイ国家の在り方を象徴している。

国民の大多数、ほぼ九〇％は農業に従事している大農業国、それだけに自然との関わりは大きい、天地自然の恩恵により、得られる農作物、収穫はすべてお天とうさま次第。

一日一日が平穏無事に過ぎることのみに価値をもつ。雨に降られ、モンスーンに吹かれても祈るしかない。凶作に見舞われても、「マイ・ペン・ライ」どうにかなるさ、と笑うしかない。

子供たちには、義務教育課程で、仏教道徳が必修になっている。仏教の根本思想である、善因善果（タム・ディ・ダイ・ディー）の、基本理念や、功徳する人（ミー・ブン）は必ず報われ、幸いを得ると、教える。この思想は、タイの隅々まで浸透しており、人間が社会性をもつ様になった時、「他人の為になる」というこの教えこそはいづれ国にあっても非常に大切な徳目だと思う。また功徳の中の最大は寺院や僧侶に布施をすることだと教え、それを心から信奉する国民。その期待に僧界や僧侶、どうしても応える必要がある。崇拝され、尊敬される僧侶の責務はさらに大きくこれに応えるためには修行に徹し、学びを深くし、そして「人を教え、導く」だけの力をつけてゆく、その力こそ最大の説得力であり、益々僧位を高くする。どこの寺院を訪ねても、たくさんの比丘が、数多くの信者に対し、マンツーマンで指導している様態を目にする。これはやはりすごいことだと思う。

仮に四〇万の僧侶が、マンツーマンで指導に当たるとする、僅か二ケ月間で国民全員を導ける体制にある。例えばの話だから、そんなことはないがそれ程人々と僧侶の関係は不可分であり、親しいものだと言いたかった。四〇万人は、雨期を基準とした数である。一定しているわけではない。それでも、男子六〇名に一人の割合

で、比丘がいて、比丘一人を六〇名の男子が一日二度、朝、昼の施食をしていることになる。単純計算しても一日八十万食大乗仏教とは比べようがない。依然として出家者は、予備軍を含め、増える傾向にあっても、減ることはないという。これはタイ独特の社会現象。一方比丘の大半は、働き盛りの青年たち、この潜在労働力が、全く生産活動に従事しない事情は、どう見ても、国の成長、発展に支障をきたすのではないかと心配もする。

しかしそんなことよりも、仏心尊い人づくり、心づくりが優先する国柄、いかなる犠牲を払っても、結果的に仏教を擁護する国の在り方、大乗のおかれた立場とは随分ちがうので一朝に理解できるものではない。タイ国は国の成長、発展は、いつの時代でも、マイ・ペン・ライ、ゆっくり、あわてずということなのだろう。

得度式

「出家」とは、字のごとく家から離れること、従って家を捨て、社会生活を放棄することになる。住む家がなければ生活も持続的に営むことができないばかりか、経済生活も当然にして維持できない。出家するということは、宗教的見地がなければ、恐ろしきこと、人間の常識から逸脱し、反社会的、反人間的としか受けとりようがない。どんなに美しく表現しようとも、全く生産活動を行わないわけだから、生きてゆくためには、日々の糧を、在家者（一般社会）から、得なければならない。これが善意の家出だから理解するとして出家イコール解脱（煩悩を脱して安らかになること）が出家者の終極の目的とするなら、煩い多く、せま苦しい家の中や、騒々しい生活環境から、離れることはいつの時代でも、必要なのかもしれない。ただ私ごとき

凡人には、どう考えても、出家者の常識は、まったく非常識としかうつらないから仕末がわるい。だからいまだに、出家も得度も叶わないでいる。

折角、神聖な「得度式」に臨んであらぬことを考えたり、否定的な思いを抱いては、罪が深い。またこれから純粋に出家得度しようとする青年たちには失礼というもの。私のこの得度式への参加は、黒田方丈より檀家総代の総会で決定し、十五周年記念の留学僧得度式、その記念写真家として、又、記録係として参加してほしいと依頼されたのである。

善光寺留学僧は十六年間に亘り、派遣をくり返している。既に一〇〇名以上に及んで派遣国も一八ケ国になる。その記念すべき第一回の派遣先は、ワットパクナム。そして今回また、三名の留学僧。一般公募により吉田日光師（福井県日蓮宗住職）いまひとり、黒田方丈の愛弟子・福田智昭師（ロス・禅センター開教師を勤め、さらに今回、上座仏教に）、方丈と全く逆コースを歩く国際派。いまひとり横浜善光寺正統継承者黒田博志師（方丈三男）。十五周年記念にふさわしい顔ぶれ。

歴史はまさに繰り返す、三十五年前、博志氏の父・方丈も上座仏教に学び、大いなる放棄をする、国を捨て、家を捨て、大乗を捨て、親兄弟を捨て、一切世俗の欲望を捨て去って一年半、方丈の述懐によれば二度と日本の土を踏むことはないとの決意もあったとか、いまその子が師であり、父の後を踏んで、出家得度する。兄弟弟子まで供って、これ迄、父より上座仏教の「行」については、そのきびしさや恐ろしさをイヤという程、聞かされて来たに違いない。父がやったことは、子はやらないというのが世の常なのに、父から強要されたか、或いは本人自ら求めたのか知りようもない、兄弟弟子智昭師も誘われて止むなしか、人のよさが仇になる二人なら

同時ということはあるまいどちらかが、骨を拾うだろう。いづれにしても生半可で臨める行ではない。原始仏教に限りなく近い上座仏教の修行環境はきびしい、食べることさえままならない。

学ぶ教典はパーリー語。二人の若者はいまどきのもやし人間、衛生環境の整った日本では、免疫性も乏しく、あらゆる感染症に抵抗力をもっていない。都会に育ったが運のつき、さらにはおまけに青春真ッ只中ときている。父のように雑草ではない。それだけに境遇に負けないで元気でとりくんで欲しいと願う。ウソから出たマコトの喩えもある。邪が出るかマコトがでるか。得度式の後見人は、日光師に善光寺総代。智昭師に父、福田教授。博志師に父、黒田方丈。これ以上の後見人はない、さらに土屋先生ご夫妻、山泉社長ご夫妻の参列者、あとは儀式を待つのみ。方丈以外の参加者は上座仏教の得度式を知らない。私もはじめてだが、方丈にご縁いただいて以来このとしまで、見ていなかった。先にも少しふれたがみ仏の引き合わせか、私の甥子が出家した、安名を大豊賢心、壮厳にして、真摯な儀式だったそれを目のあたりにして、仏弟子になることの尊さを知る。上座仏教とて原点は同じ、三十分位で終えるものと思っていた。しかし聞いて驚く。通常は六十分、通訳が入るから悠に九十分はかかるだろうとのこと。たとえ一日かかろうともそのために来たのだから。得度式までは、三時間の余裕、方丈の発案、折角パーリー語の権威者もおいでのこと、勉強会を開くことになる。まこと願ったり、叶ったり。

さて留学僧、この時点ではまだ会っていない。既に三名は、十日も前に到着寺院に籠もって、得度式の準備にこれ努めている。基本的な戒律（ビイナヤ）を学んでいるはずである。式では、教戒師との問答、パーリー語で答える。儀式と

いうより、入門試験。

やがて三名が現れる。方丈は顔を見るなり「どうだい元気そうだネ。パーリー語は覚えたかい。自信をもって得度式に臨めるかい」「ハイ、なんとか」「なんとかでは困るんだよ」「……」。

「もう十日、二百四十時間も過ごしているんだヨ」「……」。「どうだい、やめて帰るんだったら今なら間に合うぞ。入ったら後には引けないのだからネ」「……ハイ」どこまでも方丈は大乗僧侶らしく脅しているように見える。折角、父、母に会えたよろこびも束の間、それも吹っ飛んでしまった。途端に留学僧の顔が引きつっている。日光師は日蓮宗からの代表選手、これまで大概の難行苦行に堪えてきた戦士。それでも心なしか、色が失せている。いまさら弱音も吐けない。暗誦する段階で戒律のなんたるかもおよそ承知している。二二七条の戒律は、息をするだけでも、吸うていいのか、吐いていいのか、戸惑う程の細部に亘る。親子の再会も、わずか五分、すでに師と弟子でしかなかった。そばにいて胸の詰る思いがする。慰め、労わることばも出せないでいる。頭も青く剃り落とし眉毛もない、目だけが異様に輝く。お歯黒があれば、平安時代の堤中納言。

両先生の講義は、別棟、およそ三〇〇畳もあろうか、机と椅子が数百も並べてある。

道場か精舎か、すでに先客あり。群れをなして、寝そべったり、歩き回っている犬と猫。

その隅っこを借用、とりあえず円卓式に囲む。坐りながらもう始まっている。司会もなければ、はじめる合図もない。方丈は「得度行・解脱」と題して、話しはじめている。

モトモト私は、生まれながら寺の子。だからといって経など読む気にはならない。家にいても、自分の家なのか、人の家なのかわからない、

いつでも他人がいる自分の家。

父白純大和尚に、僧侶になれと進められた覚えはない。兄たちはみな立派、生まれながらの僧侶、父の意志を読んで、せっせと歩いていく、都合七人の男兄弟。私はその五男坊、置かれている状況は、どうでもいいポジション。

特に期待されてもいない僧侶になるなど考えてもいなかった。しかし環境的影響は大きく、門前の小僧も、いつとはなしに仏門へと歩いていた。父は言う。お前は、好きな道を歩けばいい。いいと言うても、どうすればよいのかわからない、あとには、まだ二人も弟が続いている。父は経済的にも苦しいなかから、大学院まで援助してくれた。母の遣り繰りは一汐ではなかったと思う。家でいつも口にするのは、お供えものか、おさがりものでしかない、それがお寺の台所。

これから先なんとしても自分の力で歩かねばならない。そんな時期に来ていた、母は私の性格を見抜き危ないと思っている、どう転ぶかわからないタケシ。

願わくば、仏門にあることを、という母の思いは痛い程わかっていた。あの頃の父と母のご苦労をいま此処に来て、ふと想い出しております。父に私がなにか相談をもちかけると、いつも口ぐせのように、タケシ死ぬなら、書物の中、生きるなら仏の道。名をとるか、実をとるか、そのときはタケシ「名を捨てる」ことが大事だ、僧侶たるもの、誠心誠意檀家に尽せとも言っていた。父の生きざまは、すべて「人のために」ということだった。

上座仏教の「行」は孤独と閑寂でしかない自分の一切を投げ出す。これが解脱の道だがそれができない。戒律を守るということは「自分を律する」ということ、張りつめた、一日一日を終える。自分が「無知」だと気づく迄、随分時

間を要した。自分を捨て、苦からの脱出を試みるそして、これをわかろうとあせる。実はこれが無知というもの、理屈でわかろうとする間は、行になっていない。

心身は疲労困憊、はじめのころは、瞑想どころではなかった。いつ死ぬのかそんな不安すら起こる。それも数えきれない。当時の生活環境は今と比べられないほど、極めてきびしいものだった。此処で生きて「行」するためには「食」が必要。食べるためには托鉢する、一日の糧を得るために歩く、歩くとお腹が空く、歩かねば一日の糧が得られない。なぜオレはここにいるのだ、いったいなにをしようとしているのだ、自分の存在すら、見失いかけていた。そんな時、父の言ったことを想い出していた。「タケシ、水の一杯入ったコップに水を注いでみても水はあふれるたけだ。一滴も入らぬばかりか周囲を水びたしにする。なあタケシ、心のコップは空にして上に向けて注がにゃナァ」一年も過したある日のこと当時の私は極限の毎日、窮地、泥沼とはあのことか、追いつめて、追いつめて、追いつめられてゆく。そんなときは、一心不乱に経を読む、それしか方法がない。そんなころだった。ふっと、なにか体が軽く、自身の重力を感じない、頭の中が全く空間になってしまい、お腹も空かない。周囲の汚物さえ、美に輝いている。虫や蚊にさされ、血を吸いとられていても、気にならない。あれは私の中で大いなる変革をもたらした瞬間だった。われながら透徹した叡知の目が開き、実存のなんたるかを、はっきり認識できるようになっていた。その時点では、もはや何ものも恐れず、心動かされることもなくなっていた。あの時、父の言う、ボクの心のコップが空になっていたのかもしれない。それは、私にとってかつてなかった、大事件だった。私に悟りの境地をもったことがあるかと問われ

れば、〝悟り〟という大それたことではないが父が子に与えた、最高の贈りもの、この寺この場所で私は私の目で私を見たこの瞬間が私の悟りだったのかもしれない。

よく人から、なぜまたタイの仏教ですかと聞かれることがある。これまで一度も、明かしたことはない、そして語ったこともない、しかし、ここには私だけの郷里が…。失いかけていた自分をよみがえらせてくれました。父白純大和尚と私、私と息子、わかってもらえましょうか。大乗ルート、小乗ルートのジョイントになる場所なんです。

この時、方丈の目に熱い、大粒の輝きがふくらんでいた。当時がそのままに映し出されていたのだろう。

私もこれ迄、方丈になぜ、タイですか、なぜ上座仏教ですか、何度聞いたか、問うたかわからない。いま初めて「なぜ」かがわかった。ここには方丈の魂がある。菩提樹もあった。さらにつづける。

ここでの修行は片手間の行ではない。そんなことでは、先づ成道はおぼつかない。私は、新しい自分の発見から、次々ともちきれない程の新しい誓いをもった。この感動は私ひとりで享受するものではない。多くの人々に味わってもらいたい。『日本から人を送り出そう、広く世界にも送り出そう、また世界中の人を日本に呼び、真の仏教を学んでもらおう』。そのためには、日本に『ボクの拠点（寺）が必要』だなどと、「途方」もないことにどんどん世界が広がってゆく。私の力でできることではないしかし、私の思いを人に伝えれば、キットわかってもらえる、キットお力添えがいただけると思い込んでしまった。いまにして思えばその通り、自分の一身において実現した寺ができ、留学僧育英会ができ、ま

た海外から、日本へ留学僧を呼ぶことができている。「途方」もないことではなかった。これは、お釈迦さまのご計画を、私がお手伝いしただけのことだということをいままたあらためてその思いを深くしていると、言う。ただあの時、全く頭の中に映らなかったことがある。結婚する。子供ができる、そして子供がここに来るなどと考えもしなかった。当然にして、独身協会の会長であり続けると思っていた。どこかでか踏みはずしたものと思う。わからない。

さらに、私はここで大乗の教える教義と、叢林の宗とする只管打坐の素晴らしさを再認識する。それ迄の私は、生半可に字が読めたり、理屈がわかったりしたがために教義がどうの、教理がどうの、方法がどうの、僧侶がどうのと明け暮れていた。そんなことがなんになる。人間にとって一番大事なことは、やるべきことを、いますぐやることだ。私にとって、大事なことは、常に原点復帰。「迷うたら、スタートに還れ」の諺ではないがそれに漸く気づく。〃宗祖を通して釈尊に還れ〃これが私の終生のモットーになった。これは私だけの信条。三十五年使い続けて尚新しい。

これは、同時に〃身を削り人に尽さんスリコギのその味知れる人ぞ尊し〃これも包含。それもこれもわが身を削る以外、人の、ものの尊さを知る方法はない。解らない奴は、いい子して、身を削っていないからだ、どうでしょうと。止まること知らず、迫りながら話し続ける方丈。

最後に、私を継承すると、約して臨んだ息子、ここまでは私の後を踏んでくれました。これから先どうなるかわかりません、本人の心掛け次第です。まことに「人を導き、育てる」ことはむづかしい。ましてや吾が子となれば、さらにむづかしい。だれでもわが子よかれとその良き成長を願わぬ親はない。その為には、あらゆる

犠牲を厭わないのが親の常。こどもに幸あれと、願いつも、叱る、たたく、打つ、撫でるも、すべては親の至情。いま私は、あらためてそんなことを思い知る。

これすべてみ仏のお導きでありお慈悲と感得しております、と締めくくった。

続いて駒澤大学福田教授。日本屈指のパーリー語権威者、仏陀の教えを言語で理解するお方。「息子智昭も方丈の尊い御慈悲をいただき、御檀家の皆さまや、信者の皆様の御蔭で、留学僧として、名刹ワットパクナムに得度することになりました。唯々ありがたいの一語です」と。

先生は、上座仏教の教義。教律論、戒律と四苦、縁起等について、縷々とお話くださった。

得度式は授戒堂で行われる。これに先だち受戒者は、浄髪し（頭髪、眉毛、口及び顎髭）摘爪をする。身心を浄めたのち白衣をつけ授戒堂に向う、後見役、檀家総代、役員とあとに続く、日本より持参した供養、御供えの品々を夫々胸元に一杯捧げもち、あたかも大名行列が行くようにソロリソロリと式場へ。受戒者は蓮華一本合掌に添える。授戒堂への道のりは信者の人たちが列をなし、合掌し祝福をくれる。

授戒堂を中心に右遶三回（これは尊崇への感謝を表わす）、堂の正面に進み浄域であることを示す、結界標石の前に立つ、献香、献華、点燭し、跪坐三拝、のち、親族、後見人から引き離され、寺院関係者（副住職、他役僧侶）に導かれ入堂、裏正面より前後して入堂した。僧伽の僧衆も「コの字」型に着座する総勢二十五名。十六時ジャスト、教戒師大僧正の入堂、中央に着座、順々とまことに、諄諄と儀式は人ごとのように進んでゆく。やがて黄衣が手に授けられ、式師に従い、仏、法、僧に帰依の誓い、のち、十戒が順々と問答の形で与えられる

第一、生類を殺さない

第二、盗みをしない
第三、あらゆる性行為をしない
第四、ウソをつかない
第五、酒を呑まない
第六、午後に食事をしない
第七、歌、舞など娯楽にふけらない
第八、装身具、香水など用いない
第九、高く、大きい寝台にて眠らない
第十、金、銀をさわらない、受けとらない

教戒師（尊師）は戒律を授けつつ受者に回答を求める。受戒者にとって①適当であるか②適正であるか③ならば浄心でもって努めなさい。とさらに十戒は細分化され、①服装に関する作法、②一般の民家を訪れる時の作法、③食事の作法、④説法の作法、⑤大小便に関する作法など、罰則のある規定からない規定、許されない大罪と許されうる小罪、軽罪から微罪へと具体的に授けられてゆく、この間、留学僧（受戒者）よどみなく、ひとつひとつにパーリー語で応酬する。留学僧のパーリー語が的を得ているのか、あまりの見事な応答におどろく、同時にパクパクと合っている様に見えるからQ&Aになっているのだろう。しかし何度か副戒師の人差し指が動き、確認し直している場面があった。それが何を意味していたのかわからない。それがわかるのは、方丈と福田教授だけ。さいわいに子供の恥は親知るのみで他人にはわからない。

戒律の最もきびしいものは「性交の罪」。相手が動物だろうが、同性だろうが、違反者は、共住すべからざる者として（アサンワート）即、黄衣剥奪、教団外へ放逐される。比丘が結婚できないのは当然である。上座仏教徒が日本の仏教僧を堕落しているという最大の理由は、妻帯し大罪の第一に違反したる者を、僧として認めているところにあるという。大乗の僧は小乗の戒律からすれば九割以上放逐刑に当る。

この得度式で見る限り、是非もない。二二七の戒律には、微罪もあり、許され得る罪として懺悔告白で免罪されるものもある。

大乗と小乗の最大の相違は、基本的には戒律の在り方と、出家者と檀家制度の在り方に大きな違いをみせる。ここは永久に埋め合わせ、融合できるものではない。この在り方の相違を、基本的に理解させ得る方法はない。

仮りに、日本の僧侶が、タイ或いは東南アジアの仏教圏に旅行する場合妻を同伴したり、酒を食堂等で呑んだ場合、先づ好意の目はない。軽蔑されるだけ理解を求めても、制度を説明しても、全く通じないと心得たい。大罪の第一級なのだから。金、銀等にふれない。さわらないという一条は貨幣経済で成り立っている現代、とくに都市周辺に行じている。比丘には不自由この上もない、金がなければ、バスひとつ利用することもできない。当然だとすれば、それだけのことではある。仮りに比丘に欲しいものがあれば、金にふれることなく、寺の子（デット、ワット）という制度がある。寺の子に頼んで必要なものを手にすることはできる。この寺の子は、いつも寺内に過しており、俗界との仲介をする、いわゆる便利屋さん、救いの道は開かれている。

比丘は僧伽（サンガ）で生活をする。僧伽は行者の聖域、ここにあるものは、自己の救済のみに専念することが許されている。僧伽に属した黄衣の比丘は、一般社会とは全く隔絶した環境のなかで過す。従って上座仏教の本格的修行は、僧伽に招来されるや否やにかかってくる。従ってその許可条件とは戒律（具足戒）を守れる、比丘としての資質が問われていることになる。

この僧伽制度は、男子に限られ、女子にはない、女子の出家者も、かつてはあった。これは

比丘尼と呼ばれさらに戒律はきびしく、三一一ケ条の具足戒を守る必要があった。しかし比丘尼の僧伽はすでに消滅、今日上座仏教には存在していない。寺周辺で見かけたり、手伝っている白衣やピンクの天使はメーチェと呼ばれ、戒律は信者と同じく八戒に限られる。いまでも寺院周辺に庵を結び戒律をきびしくして独自の修行道場に安居し、自主的に行動しながら奉仕しているメーチェもあるという。実態はさだかではない。

さていよいよ黄衣がくだされ、着用が許される。

最后の難関に差しかかっている。そして一体得度するとは、比丘とは、行するとは、日々の心構えと、精進の在り方を確認しながら僧伽にふさわしい比丘へと導く。

留学僧は声を揃え教戒師に乞う。

「一切の苦を解脱し、涅槃を証得せんがために、尊師よ、御慈悲を垂れたまえ、われに。黄衣を賜いて、何とぞわれを出家せしたまえ」と。

尊師は、応えて正式な座法にのっとり「横坐り」を許す。この時点で尊師の許可はおりたことになる。しかし「行」する同志僧伽側の許しはでていない。尊師は得度志願者に向って静かに語りかける。「この沙弥の得度式は汝らが沙弥になること、僧になること、修行者になることだ。即ち、戒律を行じることだ。この波羅蜜を積善することが出家の目的である。精神が乱れると、仏道を成ずることができない。そのために、頭髪、体毛、爪歯、皮膚の五相を観ずる。五相に対する不浄観を修して禅定に入り、すべての執着を断ち、行三昧の境に入って解脱することが、出家者の目的だ」。

やがて尊師は、法衣の中から、肩衣（アンサ）をとり出し、受戒者の首にかける。出家者はひっかからないように頭を垂れ、耳を掌の平で押え、

授けてもらう。師弟に通い合う、ぬくみと美しい契りの在り方をみたような気がした。やがて三衣（重衣、上衣、内衣）が授与され、黄衣着用を指示する。受者三名は堂を退き裏庭の太陽のもとカメラは追っかける。待機していた比丘たち、一人に三名ないし四名係りが手早く白衣を落し、素っ裸にしてしまい、黄衣を巻きつけてゆく。三人は緊張のなかにも、青空一点に視線を射て、晴々とした趣である。威風堂々のうちに華麗さえ観じる。さあ、比丘の誕生である。

最后に托鉢する一鉢を如法に被着。右肩を顕わしたテーラワーダ（寺院内のみの僧形）の沙弥姿。終えて堂に戻り、尊師の前に立つ、尊師は、ひとり、ひとりを目で追う様にしっかりと確認する。

うしろに坐し黄衣に包まれた比丘を拝す、それを見守る父と母、後見役の声が堂一杯に広がる。「子供よ!!今日はお前たちにとって残された人生の第一歩だ。どんなにきびしくとも、どんなに辛くとも、人生はただ一人の旅ぞ、頼りになるのは自分だけ、だれ一人一緒にはいてはくれない、それが覚悟だ。なにもかも捨てろ。背負っていたものを捨てろ。目をつぶって捨てろ、涙をふるって捨てろ。いいかい、捨てきったとき、お前たちは、新しい自分にめぐり会える。お前たちは、ここに、いまここに、いま一人の自分に会いに来たんだ。来たんだゾーオ」と絶叫する声が聞えた。否そんな声が聞えたように…思った。

尊師は比丘を前にして、眈眈として淡淡と辺りを払う。ひときわ大きな声、「汝ら傾聴せよ、これは汝らにとって、真実を述べるときである。即ちこれらのことにつき、僧伽の中で問われたら、事実なら然り。事実でなければ然らず。と申し述べよ。事実に困惑することなかれ、当惑すること勿れ」と尊師は、ふりしぼるように、

ひとりひとりに、問いかけてゆく。

『汝、癩病ありや。汝腫ありや。汝疱瘡ありや。汝肺病ありや。汝癲病ありや。汝人間なりや。汝男子なりや。汝自由者なりや。汝負債なき身なりや。汝公務に仕えざる身なりや。汝父母の同意を得しや。汝二十歳に達しや。汝衣鉢は完璧なりや。汝の名はいかに。汝の親教師の尊名はいかに』と、Ｙｅｓ、Ｎｏを求め、合わせて認識あるか、確認する。承りながら二五〇〇年前にタイムスリップする。戒律の中には、すでに死語となっているものもある。おそらくこの若者たち、その語のなんたるか知らないものもあろう。時代とともに少し変化させてもいいのではないかとなどと思う。死語に代わる、新しい時代の、新しい心配や、感染症など、―しかし変えられないのが歴史、かわらないのが伝統、変えてもいいのが時代への対応ではないかなど。――戒師は、「汝ら真実を述べるとき」だと最も、語気に溢れていたから余程大事な徳目なんだろう。

儀式も終りに近づいている。

尊師は視線を移し、僧伽に対峙するかのように一同に向って合掌。さてさてこの新しい受者たちを、僧伽に招じ入れて欲しい、と告げる。僧伽は尊師に向い合掌、『沈黙による』同意を表わす。それを見てとった受者たち「何卒、何卒、憐愍を垂れたまいてわれを召換し、救済されんことを』と大きな声で乞う。

僧伽も同時発声、尊師と受者に『おおせの通りに』と応え、承認する。

得度式も頂上にのぼりつめ、全員正面に向いて、仏陀への慈悲に感謝の誠を奉げ、読経三拝ののちすべての儀式が終了した。

儀式とはゆえ見事なストーリーが演出されている。得度式イコール僧伽入りではない、道場は全く別のものだということがわかる。いかに

僧伽の力が大きいか、伺うことができた。

あとがき

実に一時間四十分を要した得度式。尊師は、留学僧（十四回生）三年目の真野大成比丘に、都度通訳を求めた。これは参列者に対する最大の、お心遣い、おそらく黒田方丈に対する礼であり、敬意をお示しになったと思う。それにしても、僅か三年目、真野比丘の通訳は、見事としか言いようがない。比丘の存在がなかったら、なにがなんだか解らないうちに、ながーい時間を過していたかもしれない。

得度式を順々と追いかけ、進行のままに、書いてきた。しかし百聞は一見に如かず。説明しきれるものではない。

取材するについて、殊に僧伽は、聖域であり結界されている、その中を撮影するなど許されるものではない。しかし善光寺関係の取材に限って、住職より許可あり、どこを覗いても、どこを撮ってもかまいません。なんと寛大、この寛容さ、解放されたお持て成しに合掌。それもこれも、方丈への信頼、今日仏法交流に身を削り、身を粉にして、尽力されていることへの、配慮が感じられる。

七月のバンコックは、猛烈な太陽、お湯でも浴びせられるような湿度。それでも早朝のひとき、涼風さえ味わうことができる。そんな時分、至るところ、ひときわ鮮やか、三衣のオレンジ僧、きょうも比丘たちの托鉢風景が、家々の軒先、屋台ぐるまの前で、左肩に鉄鉢を落し、両脇にかかえこんだり、一日の糧を得るために黙々と歩いている。これぞタイならではの風物詩。

ただ観光気分で見ている分には、この様に映る、しかし実際は修行の身。そんな生易しいことではない。中村元訳、スッタニパータの一文

に「托鉢僧には、合掌し礼拝せよ、飲食をもって彼らに供養せよ」と。比丘は、在家者の義務としての施食、供養を受納するがために訪れる。それが定めだと示されている。貰いに行くのではない、布施、施食するものを受けとりに行く。方丈の話の中に「托鉢しながら糧を得る、そのために訪ね歩くことは、苦しかった」と駆け出しのころの心情を吐露している。比丘の托鉢は生きるためにではない。その様に考えてはいけなかった。これは上座仏教の最も大切な徳目、いわゆるタン・ブン（善行善果）の手助けをすることになる。これが理解できねば、上座仏教はわからない。

日本では、滅多に見かけなくなったが、托鉢の習慣はあるにはあった。しかしその心は「あげてやった」ではなかろうか。

大乗で説く、布施、供養、施食、施餓鬼など、益々上滑りしてしまう。いわゆる理解に必要なベースがないからむづかしい。日本の経済大国は、必ずしも個人生活に結びついていない、実に不思議な現象。物質文明は世界一栄えているのに心の豊さや、安らぎのない奇妙な事態に直面して久しい。なぜなのか、つきつめてゆけばはっきりしてくる。

「所有欲」が収入と消費グセをはるかに超えてしまっているということ。丁度これを書いているとき（7月24日）、ＮＨＫのクローズアップ現代というニュース番組を耳にした。御殿場の山の中にブランドものだけの一大ショッピングセンターをオープンした。アメリカから一人の女性がやって来て高級ブランドものの激安店を開いた。なぜ山の中なのかに対し、土地が安いからという。いよいよ初日、四五〇〇名の来店を予測、ところが東京よりバスで買物ツアーが乗り込んで来た。来場者四倍、売上五倍。この有様をみた彼女クレージー、クレージと連発し

ていた。なんと日本人は金もちなんだろう、一人が買えばみんな同じものを買うこれならすぐにでも全国に多店化出来るとインタビューに応えていた。

所有欲を充したときの幸福感は、束の間、人並以上にありたいとしてまた次のモノが欲しくなる。幸福は止まらず、すぐ慣れてしまう。そしてまた、永久に満足感は得られない。ここのところを、上座仏教は見事に教える。そこで人間にとって最も大事な正しい知恵として与えてゆく。

さらについでに、私の家は、公園を前にした角地、立地は最高、住宅地の中央に建つ。お蔭で市より、立地の良さを認められ。家の入口が、地域の「ゴミ出し場」として選ばれた。

隔日で分別出しが行われ、百世帯余りの家から、出る、出る、よくもまあこんなに出るものだと驚くゴミの山、それだけではない。粗大、燃えないゴミの日など、家具、電化製品、アンテークもの、衣類、フトン、自転車、単車まで、立派で、高価で、価値あるものが山と積まれる。それが年末とか特別な日ではない。毎回都度だから、時々、大きな袋など開けてみたくなる。もしかして、ご主人でも入れられ粗大ゴミとして、出されていないかと。「捨てる。消費する。文化は」まだ衰えていない。手にした瞬間の幸福感は、粗大ゴミとなって捨てられてゆく。これでは経済大国と幸福感は永久につながらない。「もったいない」「物を粗末にするな」「神仏に対し罰があたる」「米一粒」「菜一切」「紙一枚」「紐一本」これなど懐しい。平気で手にして、平気で捨てる。空恐しいこと、天罰当らずしてどうなる。どんなものでも、いのちを全うさせてあげる心こそ所有欲からの開放になる。

お釈迦さまの教えているところ、人間は「無知」ゆえに、あらゆる欲望から逃げられないで

いる、これこそ最大の苦、この欲望から逃れる「知慧」さえ持てば、だれでも幸福になり得るという、実に単純にして明解に道を教えている。

二〇〇一年二月、タイ仏教界としては、関係者の努力が実り、ワットパクナム寺院の日本別院が、成田国際空港の近く完成間近となっているが、日本仏教界も大歓迎を示している。

上座仏教寺院の日本進出。仏教の国際交流も、いよいよ本格的になって来た。大乗、小乗の融合も遠くはない。大事なことは、人さまのいいところをなんでもいただくこと。マネすること。吸収すること。いいところは出し合うこと。これが度量というもの。私の提案は、先づ上座仏教より、比丘、出家制度を部分輸入する。日本からは檀家制度（交番制度を輸出した様に）を輸出する。いづれも完成品では、双方の「利益」にも乏しく、いささか歪みが生ずる恐れあり。特に戒律の扱いは、夫々の思惑により、都合よく処理、国と国の中間地点にフリーゾーンを設け（株）ワットテンプルの、精舎において、夫々の国の規格に合うよう組み立て完成品とし。そして流通にのせる。

その前に相互間で人材交流を主にバーター制により推進する。一〇〇〇年先を見すえ余裕をもってとりくめば、程良い「中乗仏教」が誕生するかもしれない。

出逢い

ここまで書いてきた―私は黒田武志という「人となり」を、だれよりも承知していると思い込んでいるからである。方丈に尋ねて書いている部分は極めて少ない。遠く過ぎた日を想い起こすとき、互いは青春二十六歳、大本山總持寺、夏季摂心参禅会、方丈は参禅者への指導僧として雲水であり、私は一般人として参加、すでに亡き善光寺開基に連れられ、しぶしぶと参禅す

る。縁起とはこんなことを謂うのか、このときが抑、方丈との運命的出逢いとなる（成寿21・22号に掲載）。以来、方丈は私の知己であり、師友。出逢いの瞬時に、すでに目標と方向を共有する。徐々にではない。互いは、学びあい、励ましあい、助けあう間柄。そしていつの間にやら四十年。この間、お互いが「その場かぎり」であったことは一度もない。

よくオーラ（aura）を発散しているというが、おおげさに言うなら、この時の雲水（何千何百という中で）に飛び抜けた、霊気と圧倒される様な覇気を感じていた。特に何か特別にあった訳ではない、話すチャンスさえない、はっきりしているのは、耳に残る声だけ。参禅中は面壁しているから、全く顔を見ることはない。ただこの方がうしろにいるだけで凛々たる気魄を感じる。

私はそれまでそんな力を全身に受けたことはなかった。たまたま八日目下山一〇分前、私共の宿舎になんとなく飛び込んで来たひとりの雲水。私どもを労らってくださる。以心伝心だろうか「あの雲水ではないか」しかと声に覚えあり、私は早速ひとつだけ先生にお尋ねしたいと申し出る、すると雲水は「どうぞ、どうぞ」という。

ではいったい「悟り」とはなんですか。

雲水はその場にドッカと胡坐を組んで頭を掻き掻き、「アハハハァー悟りですか、悟りですネエ。それがわかれば、私はここにはおりませんヨ。これでいいですか」。全く呆気にとられる。これこそお釈迦さまの同事。たったこれだけのこと、瞬時に目標と方向を暗黙の中に共有して別れる。実に面白いこれが出逢いのはじまり。その翌日から大阪の本社を臨時休業にする。そして全社員三泊四日の参禅会、その指導を黒田雲水にいただいた。都合十一日間、坐ったこと

になる。それからというもの、先生の御法話をいただきながら幹部社員は、両本山の夏季、臘八、報恩摂心にも参加、私も五度上山参禅する。

或る時期、雲水に憧れ、先生を羨しく思ったことがある。「僧侶になることは難しくない、しかし僧侶であることは、非常にムズカシイ」

と言われたことが忘れられない。この頃の方丈には、人に言えぬ修行上の悩みがあったことをのちに知る。そんなこととは関係なく実に積極的に教えていただく。方丈はまた、仕事について、「仕事というものは、自分がしたくてするものではない、仏さまがさせてくださるものだ、どんなに働きたいと思っても、できなくなるときがきっと来る。仕事が与えられているときは、感謝の心で精一杯働くこと。これがわかりはじめると仕事らしい仕事ができるようになる」といわれたことも私を変えた。

「仕事は世間さまからいただくもの」こんな心が少しわかりかけると、おもしろく、そして楽しくなる。とてもありがたいこと。

私はこんなすばらしい方丈に、罪を犯し、負い目を感じていることがある。いわゆる、仏道者としての黒田雲水がめざす尊い理想を砕いてしまったという事実。方丈の修行時代、道に従い頑なに「独身を貫ぬく」と、公言して憚からないころ、「寺をつくる」という時運がめぐって来た。アメリカより帰国して間もなくのことだった。私はその計画を、はじめて打ち明けられ、これは決して夢物語りではないと思った。

私は即座に申し上げた。「いったいどうすれば手に入るのですか」と。方丈は言う、「資金が必要です。でも私は無一文、金がない。金がなければ手に入りません。これは私に与えられた天命です。東郷さんどうしたらいいのでしょう」という。「簡単です。銀行から借りる。借りられないなら、夜、頬被りして、金のありそうなと

ころに入るのです。どうでしょう」咄嗟にそう言った。方丈は「それができないから相談しているのです。東郷さんどうする」。いよいよ来たと思った。「先生これが天の暦数なら従いましょう、しかし私が協力させていただくなら、ひとつだけ条件があります。先ず、寺の経営には世話する女房の存在が絶対条件です。先生が〝嫁はいらん、寺はいる〟というのであったら、協力できません。私の条件を充たすなら、全面的に責任をもって協力します」とここまでは言った。これは無茶な対話。土地を取得し、伽藍までという費用を見たとき、三十五年も前のこと少くともいまの感覚では三、四億の金額、まず無理だと真に観じていた。

あまりに唐突な話、無碍に断ることもできずそのとき「独身を貫ぬく」と公言している方丈のそれを思い出す。この信念は簡単に崩れるものではないと確信、出まかせに打って出た条件だった。

先生私も忙しい、返事はいますぐお願いしたい。考えて二・三日後ということではないと申し上げた。忘れもしない。これは二十九歳のときの攻防。ところが方丈「嫁も貰い、寺もつくる」と言う。私はあわてて一体戒律はどうなりますかと、問うてみる「捨てます。」と一言、私の狼狽ぶりは想像できると思う。仕方がない、もう従うほかない、と思いながらいまひとつ条件をつないだ。「嫁は、私におまかせ下さい。私のすすめる御方であり、それも一度きり」だと言った。方丈は「意のままに」とまた一言。いよいよ、私は追いつめられ、自分の出した条件に、自分が縛られてしまった。もう後には引けない、嫁のこと、金のこと、寺のこと。なにか手だてがあるはずもない。私に出来る可能性は唯一社長（のち開基）に縋（すが）ること、嫁とりは社長夫人に頼む以外、全く方法は考えられなかっ

降三世明王図
三喜庵

た。どう考えても、高が一介の平社員、会社を代表している様な錯覚をしている、とても簡単なことではない。本社（大阪）に帰って社長に子細を話す。そして協力を求める。これは企業で謂う、事後報告、ホメたことではない。その上、事後承諾まで得ようとしている、それも少々の金ではない。ところが聞いていた社長、ニッコリ笑って即座に「おもしろい、いまどき人材育成の寺とは、意を得たり。一切させてもらおうではないか、嫁のことは、女房（当時副社長）にまかせればいい」という。私は耳を疑った。稍あって、黒田先生との約束はどうなっている（約束などできる立場ではない、事と次第では、首に関わる）約束は…と言ったときに、いつまで、何年間で、どれだけ工面すればいいのか。私はホッとする。成る程当然です。たしかにその通り。私と方丈の間で、そこまで詰めていない。ただ私的に基本的合意をしただけのこと、早速、方丈に電話する「そうですか金は三カ月後で結構です。それ以上延びると人手に渡ります。会社のまとまった金ではなく願わくば、折角ならひとり、ひとりの浄財として、できるだけ多くの方々からのご喜捨（よろこんで施しをすること）をいただきたい」。なんという言い方でしょう。私が方丈の紐なら、わかり易い表現。

私はパニクッてしまった。貰うことまで条件をつける、この勝手気ままな方丈に思うように手玉にとられてしまっている。私の打つ手、打つ手に狂いが生じている。ところが不思議とこの方のそばにいるとこの方のために働きたくなる。また社長に伝える、方便など通用しないから、そのまま、報告する。「ふーんヤッパリそうか。そうだったのか」と、ひとりで合点し相槌うっている。「トーゴ!!いったい黒田という男はなにもんだ」と言いわれる。「ハイ化物です。」「その通り、只者ではないヨ、素晴しいことだ。実

に真理を得ている。この在り方は世のため、人のためにとしか思っていない稀なお方だぞ」と言う。ここが偉いのです。浄財、ご喜捨という仏教の基本的理解のできる「悟性」こそ開基たる所以完全に見抜いている。「話は決まった。じゃあ東郷、お前の番だ。お前が決めたことはお前が責任をもつ。許可するから、期間内何処でもいい。誰でもいい。すべてはまかす、もしも集め足りぬ時は、わしが出す。存分にやってくれ」と逆に励まされてしまった。さあ大変、お金は社長、会社からは出ない。私が集めるという。窮地に追い込まれてしまう。期間は三カ月間。一日、十万円、そして九十日これを積み上げねば目標に到達しない。その頃の私の月給は五万円、日給ではない。いったいできるのか、できないのか。

兎にも角にも、歩いて動く以外、方法はない。モノや技術を売るなら目的も手段も方法もしっかりしていて、いくらでも考えられる。ところが宗教や理想や思想を売る。全く空気を売るようなこんなことで金を手にした経験がない。それからというものは業務上の出張をからませ、日本の津々浦々それこそ北海道から沖縄まで、訪ね歩いては奉賀帳を手に(これは方丈がつくってくれた)趣意書を説明、喜捨を呼びかける。三カ月で約一三八〇名の方々に協力を得ることができ、社長も、大口のご喜捨。お蔭で予定額を少し越えるところまで遂に来た。そして必要な資金を手にする。早速方丈に伝える。「先生少し余力があります。」「そうですかお金はいくらあっても邪魔にはなりませんどうぞ、どうぞ」という。この時のやりとりは、いつの間にかお互いしゃくり上げてしまい、本当にうれしかった。そしておひとり、おひとりのお心づかいと喜捨に感謝せずにおられなかった。これは、黒田武志という人となりの、人徳であり、徳性に

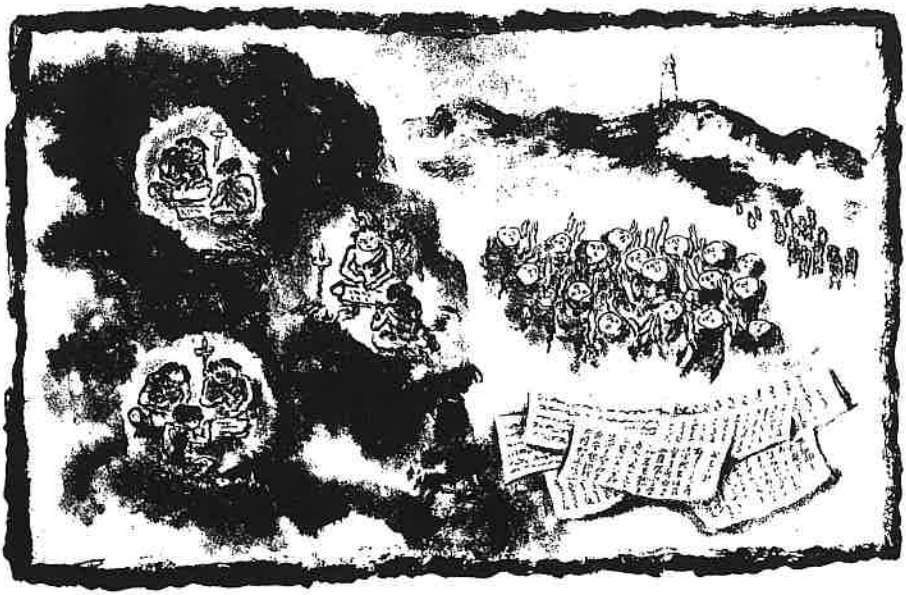
与えられた天からの賜りもの。つきない二人のこのしゃくり上げが善光寺のベース。そして私の仕事も、売上も環境も好転、このときから急上昇を辿ってゆく、まことに不思議な現象。

嫁とりの方も同時進行。当時社員として社長秘書であった才女の誉れも高い加藤倫子（当時永平寺単頭老師、息女）さんに白羽の矢が立つ。私もこれに終始荷担する。縁とは異なもの味なものといいますが、敷かれたレールに乗って双方異もなく快諾、トントンと運ぶ。方丈など一瞥もなく求婚する。ついに百日足らずでゴール。東京品川迎賓館。御二人の第一歩は善光寺の第一日、第一歩。

いづれにしても型破り、ご覧いただく方は少し滑稽に思えるかもしれない。

台所はてんやわんやの大騒ぎ。おまけがついて、新郎の父、白純大和尚のお礼のご挨拶。約束はひとこと五分。ところが延々と泣いて、泣かせて三十分。途中、時間切迫、タイムオーバーのメモ紙が二度、三度運ばれて来る。それを無視する進行係。遂に新婚旅行の列車には間に合わず、あとの祭り。この新婚さん二人と煙だけがホームに残った。人ごとながら、いい想い出です。それから二人はどこでどう過ごされたのか、いまだに聞いたことがない。この時の進行と司会はすべて私がやった訳ですから知りたくもないのです。

当時私は、戒律のなんたるかを知らず、方丈の信念に揺さぶりをかけている。これは実にいけないことだった。一方方丈も、身口意一致なく、チョイと色香を嗅がせるだけでいとも簡単に戒律を破るなど、これを堅持するという気概と信念の脆弱さは、否めない。従って方丈にも一端の責任がない訳でもない。ただ「寺づくり」という重大な局面で、これを交換条件にしたことは、仏道においていささか負い目を感ずる。

時偶もしも、倫子夫人の存在がなかったらと考えてみる。おそらく今日の黒田方丈はなかったと断言できる。だからいつだって処かまわず「ミチコ、ミチコ」と絶叫する在り方は衆知のところ。これは愛の恋の女房など云々するところではない、よーく見ていると「ミチコ、オレはこうする」ではなく「ミチコこれはどうする」という在り方。これは文法的にも命令形ではない、依存形であり、方丈は用語の活用法を誤っているように思う。従って、すでに倫子夫人なくして歩くことができなくなっている。しかしとまれ、この現象実に「寺の盛衰は女房次第」という隠された、大乗の諺に表わされているように思う。

檀家に支えられ成り立つ寺、大乗仏教寺活性化という見地から、まことに模範的絶対条件とも言える。